

## 「論理知」から「経験知」へ ～勇気を糧に～

愛知県 高等学校(国語) 教諭(120期 日本文学科)

知識は、取得の仕方によって、二つに分けられます。それは、主題にも示した、「論理知」と「経験知」の二つです。私にとって、合格までの道のりは、従来、私が頼っていた論理知を主体とした生き方から、新たなる経験知を主体とした生き方へと自分自身を進化させる道のりであったと振り返ります。

私がここで述べている、論理知とは、実体験の経験を伴わずして学び得た知識のこと、一方、経験知とは、自分自身の実体験の経験に基づいて学び得た知識のこと、と捉えています。

例えば、方言調査を行う際に、図書館での文献調査だけで得た知識のことは、論理知を指します。その一方で、同じ方言調査を行うにせよ、調査しようとする現地へと赴き、現地の人々にアンケートやインタビューなどの現地調査を行っていくなかで得た知識は、経験知を指します。この二つの調査の結果が、たとえ同じものを示したとしても、その内実は大きく変わると考えます。表面には、同じ一つの知識として捉えられるかもしれませんが、その知識取得までの過程に様々な工夫や試行錯誤を自分なりに行うかどうかによって、その知識を「理解」したかどうかに関わるからです。

私は、教職総合ゼミや講習を通じて、物事を真に理解するということが、目先の、表面に形として現れるものだけにとらわれるのではなく、その形として現れるまでの過程を、自分自身の経験で経ていくことで、理解が深まるということを実感しました。

私自身、ゼミに参加し始めた当初は、「結果が同じなら何を経ても変わらないのでは」と思うようなところが若干あり、試行錯誤することや苦勞することを少し厭う面があったと思います。その結果、表面的で浅はかな捉え方で日々を過ごしていたように感じます。今思えば、自分自身で何かを成し得るという経験が少なく、成し得る際に伴う苦勞ばかりに目が行きがちで、成し得た先の世界を知らなかったことが原因だったと思います。

私の場合、成し得た先の世界を知り、経験知が理解を深めるという上記の内容が確信に変わったのは、読解力や要約力をつけるために取り組んだ、埼玉県の過去の教育小論文の実施問題を自分なりに要約するという経験を体験した時です。

過去問を五カ年分ほど先生にコピーして頂き、取り組みました。文章を読み、キーワードなどをマーカーで引き、それらをもとにして要旨を書き出すということを教わりました。初めは、何をどのようにまとめたら良いのかが分からなかったため、各段落ごとに要旨を書き出しました。そうすると原稿用紙三枚分、文字にして役一二〇〇字程度になり、とても要約したとは言いがたいものでした。その次に、一度、自分が要約したものを更に要約し直すということを何度も繰り返しました。繰り返しの部分を一つにまとめたり、もう一度本文と照合して読み返し、足りないところを付け足したりなどということをして、毎日行い続けました。一日一回の要約を毎日繰り返したことによって、視点を捉え直す契機にもなり、昨日の自分に足りない視点などを補うことが出来ました。最終的に、自分の言葉で四〇〇字程度の要約として大体に仕上げるまでには、二週間程度要しました。最終稿と初稿を見比べると、どこをどのように何故修正したのかを自分の言葉で説明できることを実感し、自分で成し得ることで文章の理解が深まることに気づきました。

こうしたことを実感することが出来たのは、これまでにゼミで行ってきた課題に全力で取り組んできたという下地があったからです。私の場合、要約の活動を取り上げましたが、どの課題に対しても、自分なりの最大限をもって取り組み続けることで、少しずつ実感できていくと思います。その際に肝心なことは、副題にも示したように、何事に対しても全力で取り組む、その一歩目を踏み出す勇気を持ち続けることです。勇気は、迷いに打ち勝ち、行動を生み出す原動力となります。

勇気を出し、一歩目を踏み出し、今、目の前にある課題に真摯に向き合い、納得するまで自分で成し得ることを体感してみてください。そして向き合った後の自分自身から向き合う前の自分自身を見つめ直してみると、必ず感じるものがあると思います。その思いを次なる自分へと生かす。そのつながりがさらなる成長になります。その際に、私が注意していることは、課題をこなすことに重きを置くのではなく、課題を通して何を学ぶのかを意識して取り組み、常に、どうしたらより良くなるかを考えて行為に移すことです。物事の本質とは、問い続けることから始まります。その一歩目を踏み出して、課題に向き合ってもらえることを願います。

これより先の世界は私が伝えられるものではなく、皆さん自身で切り開いて、実感してみてください。私の文章を読み、その一歩目を踏み出す契機として下されば幸いです。

どのようなことであっても視点次第で全ては教員としての自分自身へとつながります。最後に、私が大事にしている言葉を贈ります。「昨日の自分より今日の自分、今日の自分より明日の自分」です。それでは、皆さんの勇気ある行動を期待しています。